

## 「作文・自己表現」再考(2)

寺田質問に即して

寺島隆吉

### 1 はじめに

先月号では「夏の研究集会」で報告された三つの自己表現指導：岩井報告「その後の私の授業改革」、野澤報告「こうすれば自分の言いたいことが英訳できる」、寺田報告「ライティングの授業について」の中で、特に寺田報告に焦点をあてて記号研方式による作文・自己表現について再考してみた。

何故なら、この報告を批判的に検討することによって、これまでの記号研における「作文・自己表現」指導のつまづきが明確になり、今後の見通しも出てくるように思われたからである。その際、彼から「辛口のコメントを」とメールで送られてきた実践報告(2)も併せて検討した。

しかし、先月号では寺田報告(その1)の最後に載せられていた疑問点については紙面の都合で次号に譲らざるを得なかった。そこで今月号では彼が提起した問題点について少し詳しく検討する。これを通じて「複文を単文に還元しながら作文する」ということの意味が少しでも深められれば幸いである。

(なお、先月号と同様に、以下の小論では動詞を で囲む作業がワープロでうまく出来ないの、その部分をゴシック&イタリックで表すことにする。)

### 2 文脈抜きの作文指導をやめよう

寺田報告「ライティング授業(その1)」の「おわりに」では次のような問題が提起されている。

「複文を授業では複文のまま英作させているが(複文のままと言っても結局作業としてはいくつかの単文を連結詞でつなげていくのだが)複文を単文に分けて「量を書かせる」指導も同時に重要なことだ。実際生徒に取り組ませると生徒がつまづく点は3つに絞れる。

1)日本語のNexusの処理に困る。SVOCにするか、SVとOCで2つの文に分けるかが問題になる。

2)関係詞を使うような文が主語の中に組み込まれている時、2文に分けた後、うまく言葉を補えない。

3)that節が主語になったり目的語・補語になる時、かえって複文のままの方が英作しやすく感じる。」

彼は上記の3点を挙げ、その具体例と説明を付け加えているので、それを順次、取り上げて検討していくことにする。まず1)として次の例文と説明が書かれている。

まず1)では、SVOCにするか、SVとOCで2つの文に分けるかが問題になる。

**Ex(1-1) 私は彼が他の女の人と歩いているのを目撃した。**これを第5文型で「私は目撃した。彼が歩いている[他の女の人と]」とするか、「私は目撃した 彼を」「その時、彼が歩いていた[他の女の人の]」と2つの英文にするように指導すべきでしょうか。

**Ex(1-2) 私は彼は正直だと思う。**「私は思う。彼は正直」「私は思う 彼はです 正直」

結構こういうところで生徒は混乱しているようです。単文にせよと指示すると「私は思う」だけで分を作ることになり、かえって連結詞を教えて書かせた方が簡単そうでした。「丸が2つあるから、センセン セン センの形だよ」と言えば良いからです。

**Ex(1-3) 私はラッキーだと思う。**

「私思う ラッキー」とする生徒が多い。ネクサスの部分が日本語では省略されていて、ラッキーの意味上の主語が存在することに気がつきません。「私思う 私です ラッキー」この後ろの「私」が隠れていることに気がつかない。

まず一般論であるが、2文で表現するか1文で英作するかは教師の力量と生徒の力量相関関係で決めざるを得ない。これは「熟語・成句を原義に遡って説明すれば丸暗記しなくても良い」と言っても、その説明を教師ができなければ仕方がないし、説明できたとしても、その説明が理解できる国語力を生徒が持っているか、あるいは生徒が理解できる程度に易しく説明できる力量を教師が持っているかが問題になるのと同じである。

では「私は彼が他の女の人と歩いているのを目撃した」の場合はどうか。これがSVOCの練習問題として出されているのであれば、まずその形式

で書けることを教える必要がある。「読みの」段階で「ネクサス」を予め教えてあげれば、その指導は容易であろう。しかしその場合でも和文に「記号づけ」をして、下記のように、(1.1.1) (1.1.2) (1.1.3) (1.1.4)という変化をたどってネクサスになっていることを生徒に確認しておく必要がある。

(1.1.1) 私は[彼が他の女のひとと歩いているのを]目撃した。

(1.1.2) 私は目撃した [彼が[他の女のひとと]歩いている]のを。

(1.1.3) 私は目撃した [彼が歩いている [他の女のひと]]

(1.1.4) 私は目撃した 彼を [[彼が)歩いている [と他の女のひと]]

さて、ネクサスという「決められた文法形式」ではなく、自己表現・自由英作文の流れの中で、このような内容のことを英語で表現したくなった生徒にどう指導するかが次の問題である。ネクサスを知らない生徒に「単文に分けなさい」と指示して、この文の英訳を教えるとすれば、どうなるのか。

まず、(1.1.1) のように記号が付けてあげれば、[彼が他の女のひとと歩いているのを]が埋め込み文であることは明らかだ。だから、2文に分けるとすれば(1.1.5)のようになりそうだ。だが、これでは日本語として不自然である。そこで、これに修正を加えると(1.1.6)となる。

(1.1.5) 私は目撃した。彼が他の女のひとと歩いているのを。

(1.1.6) 私は彼を目撃した。彼は他の女のひとと歩いていた。

しかし、これでも日本語としてはまだ不自然である。なぜなら「私は彼を目撃した」だけが単独で文頭に現れることは、普通の自然な文の流れでは考えられないからである。言いかえれば、自己表現・自由英作文では「私は彼が他の女のひとと歩いているのを目撃した」などという文を前後の文脈抜きで英訳するということはありえない、ということになる。例えば、普通の文脈では(1.1.7)のような流れになるのではないだろうか。

(1.1.7) 先日、私は街に出かけた。そこで偶然、彼を見かけた。彼は他の女のひとと歩いていた。

(1.1.8) I went downtown the other day. I happened to see him on the street. He was walking with a strange girl.

したがって、ここで大切なのは生徒に前後の文脈を考えて単文にさせることである。前後の文脈抜きで「単文に分けて英訳しなさい」と指示しても、それだけでは不自然な英語しか出てこない。英語以前に、日本語としてまず不自然だからである。こう考えると、寺田実践のつまづきは「和文英訳」と「自己表現」を混同するところから由来しているのではないか、と思わざるを得ない。これは次の例「私は彼は正直だと思う」についても同じである。以下、節を改めて、この点を検証する。

### 3 「親文」「子文」の記号づけ

寺田報告で次に問題として取り上げられている例文と解説は下記の通りである。読者がもう一度、前に戻って例文を読む手間を省くために、再度、下に引用しておく。

**Ex(1.2) 私は彼は正直だと思う。**「私は思う。彼は正直」「私は思う 彼は**です** 正直」

結構こういうところで生徒は混乱しているようです。単文にせよと指示すると「私は思う」だけで分を作ることになり、かえって連結詞を教えて書かせた方が簡単そうでした。「丸が2つあるから、センセン セン センの形だよ」と言えば良いからです。

**Ex(1.3) 私はラッキーだと思う。**

「私**思う** ラッキー」とする生徒が多い。ネクサスの部分が日本語では省略されていて、ラッキーの意味上の主語が存在することに気がつきません。「私**思う** 私**です** ラッキー」この後ろの「私」が隠れていることに気がつかない。

先にも述べたことだが、これらの例文が名詞節を導く文の「和文英訳」練習として与えられているのであれば、それをわざわざ2つに分解する必要はない。また I think that...という構文を知っていて、それを自己表現ですぐに使える生徒に「必ず単文に分けて英訳しなさい」と強制する必要もない。それは「人間に合せてベッドを選ぶのではなく、ベッドに合せて人間の足を切り落とした」という寓話にも似た愚行である。

しかし「英語を学び始めた中学生、まだ複文の書き方を知らない中学生が、上記のような内容を英語にしたいという時、どう指導するか」という問題が残っている。その時は(1.2.3)(1.3.4)(1.3.5)のように that 抜きの表現でよしとしておけばよいのである。これで立派に「通じる英語」になる。なぜなら名詞節を導く that はしばしば省略されるし、英語を母語とする子どもたちも、単文と単文を結び付けて複文を作ること学ぶのは、小学校に入ってから、かなり後のことだからである。

- (1.2.1) 私は彼は正直だと**思う**。
- (1.2.2) 私は**思う**。彼は正直
- (1.2.3) 私は**思う** [彼は**です** 正直]
- (1.3.1) 私はラッキーだと**思う**。
- (1.3.2) 私**思う**。ラッキー
- (1.3.3) I think, I am happy.
- (1.3.4) I think I am happy.
- (1.3.5) I am happy, I think.

しかし教師の悩みが上記の点にあるのではなく、生徒が(1.2.2)「私は**思う**。彼は正直」、(1.3.2)「私**思う**。ラッキー」のように、後半の「彼は正直」で「です」が抜けたり、「ラッキー」で「です」だけでなく「私」という主語も抜けてしまうことにあるとすれば、これは「複文を単文に分ける」という問題ではなく、「単文を英訳する」訓練がきちんとされていない問題ではないか。私が先に「生徒は単文をつくる」ことすらきちんと身につけていないのではないかと強く主張した根拠がここにある。

しかも寺田報告の複文分解では、(1.2.3) [私は**思う** [彼は**です** 正直]] のように be 動詞の部分が「ある」ではなく「です」になっている。be 動詞は「ある」を入れるのが記号研のセオリーだとすれば、(1.2.3)ではなく、次の(1.2.3')のようにすべきではないか。「私は」「彼は」の格助詞「は」も取り去ったほうがよい。こうして出来た(1.2.3')の不自然さが逆に日本語と英語の「構造の違い」を浮き彫りし、生徒の認識を深めることになるのである。

- (1.2.3) 私**は**思う [彼**は**です 正直]
- (1.2.3') 私 **思う** [彼 **ある** 正直だ]
- (1.3.2) [私 **思う**。ラッキー]

ところが寺田報告では(1.3.2)で「私は」の「は」を除きながら、(1.2.3)では、「は」を残存させている。小さいことのようにだが、このように和文英訳の「語順訳」プリントを丁寧に作ることが生徒の英語認識を高めていくのではないか。このことは(1.3.1)「私はラッキーだと**思う**」においても表われている。寺田報告では生徒が[私**思う**。ラッキー]と分解しがちであることを嘆いているが、もし(1.3.1)「私はラッキーだと**思う**」に最初から括弧の「記号づけ」がされていれば、このような誤りは避けることができたはずだからである。

- (1.3.1) 私はラッキーだと**思う**。
- (1.3.1') [私はラッキーだ]と**思う**。
- (1.3.1'') 私は[ラッキーだ]と**思う**。
- (1.3.2') **思う** [私 **ある** ラッキー]
- (1.3.2'') [私 **思う**] ラッキー]

上記(1.3.1')のように子文[私はラッキーだ]が括弧で括られていれば、「ラッキー」だけが宙に浮く複文分解は出てこない。寺田報告が嘆くような分解が出てくるのは、生徒が無意識に(1.3.1'') [私は[ラッキーだ]と**思う**] という分析をしているからに他ならない。しかし最初から(1.3.1')のような分析「記号づけ」がされていれば、語順入れ替えのとき、(1.3.2') **思う** [私 **ある** ラッキー]となり、(1.3.2'') [私 **思う**] ラッキー]となるはずがない。しかも、[**思う** [私 **ある** ラッキー]]は誰が見ても親文「思う」の主語が無くて不自然だから、黙っていても生徒はそれを補おうとするのである。

したがって、何度もいうが、和文に「記号づけ」は欠かせないし、それがどのように付けられているかで和文分析の正否が目に見える形で浮き彫りになる。また同時にそれが複文 単文に直接的影響を及ぼすのである。これは英文和訳の「記号づけ」でも全く同じであったはずである。私が繰り返し「教師がまず和文に「記号づけ」を！」と主張してきた所以である。生徒に「記号づけ」させるのはずっと後のことである。これも英文和訳で実証済みのことではなかったのか。

#### 4 自然な流れの単文に分解せよ

次の問題は英訳すると関係詞が出てこざるを得ない和文の分解をどうするかという問題である。しかし、その前に親文・子文、主文・従文の区別について触れておく。というのは、これまで述べ

てきた寺田報告に関して、夏の研究会が終わった直後に本人から次のようなメールが届いていたからである。かなり長いが引用する。(ただし下線は寺島による。)

今回の私の英作文の報告に関しての私の疑問点について、今後記号研のライティングの授業の追試に関わる問題だと思われるので、あえてもう一度確認させて下さい。

「別に私(寺田)の単文の分け方でも構わない。関係代名詞を使う必要もないし、どんどん単文で書かせた方がよい」というのが先生の意見だと私は受け取りました。

しかしこれは非常に難しい問題も含んでいます。議論の時間がなさそうだったので言いませんでしたが、確かに単文に分けるのは動詞に をつけさせて、その主語を見つけさせて行けば簡単です。しかし私がああ場で議論させたかったのは「今後、記号研は日本文の主文と従文の関係を意識させて分解させるか、意識させないで分解させるか」です。野沢先生や谷口先生は「日本文の最後の動詞を主文の動詞」と意識させながらの分解でしたが、私はわざと、生徒のよくやるそれが逆転してしまっている分解結果、つまり文に出てくる動詞順の分解を提示させていたのだいたいのですが…。

一見、たいして変わらないと私も複文指導するまで考えていたのですが、主文と従文が入れ替わってしまってます。まずは、日本文の最後の動詞を含む文をまずつくらせてからという分解の順番を意識させる必要はありませんか？ そうしないと複文が作れないのと同様に、半丸を使つての複文 単文( が2つの文を が一つの文に納める)方法へもつながりません。それが不要ないというのは、統一テスト下でのライティングの授業では考えられません。

前節で論じた(1.3.1') [私はラッキーだ]と思うと(1.3.1'') 私は[ラッキーだ]と思うを見れば、私が親文・子文、主文・従文の区別をした上で複文の分解をしようとしていることが明らかかなはずである。それはともかく、寺田報告では第2の問題として「生徒は関係詞節をとって単文に分解した後に、うまく言葉を補えない」と述べ、次の2つの例を挙げて解説を加えている。

**Ex(2.1) 昨日花屋で会ったばかりの男性が今日私に電話をかけてきた。**

(2.1.1) 昨日花屋で一人の男性に会った。その彼が今日私に電話をかけてきた。」

(2.1.2) 今日男性が私に電話をかけてきた。私はその男性に昨日花屋で会った。

(2.1.3) 男性は[その人と昨日花屋で出会った]私に今日電話をかけてきた。

まず、(2.1.1)のように、文に「その彼が」が補えない。また、この文の「その彼が」を関係代名詞にすると、求められた英文と違ってしまうような気がする。(非制限用法?)

**Ex(2.2)彼と過ごした3年間は夢のようだった。**

(2.2.1)私は彼と3年間過ごした。それは夢のようだった。この「それは」が補えない。この文も「それは」の部分に関係代名詞をいれて文を作ると求められた英文と少しニュアンスが違ってくと思われる。

さてそこで例文(2.1)から順次取り上げて検討していくことにする。寺田報告では相変わらず和文に「記号づけ」がされていないので、まず和文の「記号づけ」から出発する。記号をつけると下の(2.1.0)となる。

(2.1.0) [昨日]花屋で] 会ったばかり] の男性が[今日]私に]電話を かけてきた。

この分析から主文が[男性が[今日][私に]電話を かけてきた] であり、従文が [昨日][花屋で] 会ったばかり] ということが分かる。そこでメールで寄せられた疑問に答えて、「生徒がよくやるように、文に出てくる動詞の順に分解する」と、寺田報告にあるとおり、(2.1.1)になり、「日本文の最後の動詞を含む主文をまずつくらせてから」次に従文へと分解すると、寺田報告にあるような、(2.1.2)になる。問題は、このどちらがよいかということである。

(2.1.1) 昨日花屋で一人の男性に 会った。その彼が今日私に電話を かけてきた。

(2.1.2) 今日男性が私に電話を かけてきた。私はその男性に昨日花屋で 会った。

メールの主張では(2.1.2)のように分解させるべきだと言う。なぜなら、この方が主文 従文の順序になっているからであり、「そうしないと複文が作れないのと同様に、半丸を使つての複文 単文( が2つの文を が一つの文に納める)方法

へもつながりません」「それが不必要というの  
は、統一テスト下でのライティングの授業では考  
えられません」と主張しているようなのである。  
しかし正直言って、私には彼の主張する意味がよ  
く分からないのである。

と言うのは、寺田報告に載せられている(2.1.2)  
の双方とも日本語としては不自然だが、どちらが  
不自然かと言うと、むしろ(2.1.1)の方だと思われ  
るからである。なぜならでは(2.1.1)「一人の男性  
に」で始まり、「その彼が」で受けているのに対し  
て、(2.1.2)ではいきなり「男性が」で始まり、次  
の文で「その男性に」となっているからである。  
では(2.1.2)の「男性を」を「一人の男性」に書き  
換えてみたらどうか。しかし、(2.1.2)としてみて  
も、どこか不自然である。

(2.1.2') 今日一人の男性が私に電話を かけてきた。  
私はその男性に昨日花屋で 会った。

しかし良く考えてみれば、昨日 今日という時  
間軸に沿って叙述したほうが、情報の流れも自然  
と旧情報 新情報となり、文章の流れもスムーズ  
になるのは当然のことだったのである。複文を単  
文に分解する場合も、この文章の流れを無視した  
不自然なものであってはならないのは、当然のこ  
とではないだろうか。なぜなら、不自然な和文を  
英訳して、それが自然な英文になるはずがないか  
らである。単文に分解するときの視点は、主文  
従文ではなく、旧情報 新情報という流れに逆ら  
わず文章が自然かどうかなのである。

#### 5 日本語における Nexus Junction の変換

寺田報告でもうひとつ不思議なのは、(2.1.2)の  
分解法でないと、「複文が作れない」と同時に「半  
丸を使つての複文 単文( が2つの文を が一  
つの文に納める)方法へもつながりません。それ  
が必要ないというのは、統一テスト下でのライテ  
ィングの授業では考えられません」という主張で  
ある。

しかし上記の疑問・主張をよく考えてみると、  
彼が関係詞制限用法の英訳を先に考え、どうも、  
それを基に(2.1.1)の分解を「非」としているらし  
い、ということが分かってくる。

というのは、彼は既に引用した解説で「文に“そ  
の彼が”が補えない」と、生徒の貧しい日本語力  
を嘆きつつ、同時に「この文の“その彼が”を関

係代名詞にすると、求められた英文と違ってしま  
うような気がする。(非制限用法?)」と述べてい  
るからである。

つまり彼は「原文を(2.1.1)のように分解するこ  
とは、(2.1.1')のような非制限用法の英訳につな  
がり、求められている制限的用法の英訳と違って  
くる」と考えているようなのである。

(2.1.1) 昨日、花屋で一人の男性に 会った。その彼が  
今日、私に電話を かけてきた。

(2.1.1') I met a man at the flower shop yesterday.  
He made a phone call to me today.

(2.1.1'') Yesterday I met a man at the flower shop,  
who made a phone call to me today.

つまり、原文に「記号づけ」すると(2.1.0)のよ  
うになり、そこで「昨日、花屋で会ったばかりの」  
で修飾されている「男性が」を前に出すと(2.1.3)  
になる。彼はこの(2.1.3)英訳して初めて求められ  
ている制限用法の英訳が出来ると考えているよう  
なのである。

(2.1.0) [昨日花屋で 会ったばかり]の男性が 今日私  
に電話を かけてきた。

(2.1.3) 男性は [その人と昨日花屋で出会った]私に  
今日電話を かけてきた。

(2.1.3') The man [whom I met at the flower shop  
yesterday] made a phone call to me today.

こうして初めて、求められている制限用法の英  
訳が得られるし、このような英文を得るためには、  
日本語の分解も主文 従文という原則に従わなけ  
ればならない。つまり分解は(2.1.2)でなければ  
ならない。これが寺田報告の考え方のようである。

(2.1.2) 今日男性が私に電話を かけてきた。私はその  
男性に昨日花屋で 会った。

(2.1.2') A man made a phone call to me today. I  
met him at the flower shop yesterday.

しかし(2.1.2)の前半部である「今日、男性が私  
に電話を かけてきた」を Junction に転換すると  
「今日、私に電話を かけてきた男性」となり、そ  
れを後半部「私はその男性に昨日花屋で 会った」  
につなげると、「今日、私に電話を かけてきた男性  
に私は昨日花屋で 会った」となり、日本語として

不自然であるだけでなく、むしろ原文からますます離れてしまう。

他方、「きのう花屋で会った男性」+「その彼が今日、私に電話をかけてきた」「きのう花屋で会った男性が今日、私に電話をかけてきた」は、制限用法としても正しく、日本語として自然である。が、寺田報告では日本語の自然な流れよりも主文 従文の流れを優先するので、(2.1.1)よりも(2.1.2)の方が正しいと映るのである。

(2.1.1) 昨日、花屋で一人の男性に会った。その彼が今日、私に電話をかけてきた。

(2.1.2) 今日男性が私に電話をかけてきた。私はその男性に昨日花屋で会った。

「きのう花屋で一人の男性に出会った」「きのう花屋で会った男性」という変換は、いわゆる Nexus Junction と呼ばれる極く自然な変換である。生徒が関係詞文を作れないのは、このような Nexus Junction の変換を日本語で出来ないからであって英語学力の問題ではない。これは、既に『英語にとって学力とは何か』や『英語にとって授業とは何か』でも指摘したことであるし、山田昇司報告(『読みの指導と英文法：授業の工夫第6巻』)も自分の生徒に上記のような転換練習をさせて既に実証済みのことである。

#### 6 「原文に忠実な訳」とは何か

寺田報告でもうひとつ気になるのは、「そうしないと複文が作れないのと同様に、半丸を使っての複文 単文( が2つの文を が一つの文に納める)方法へもつながりません。それが不必要というのは、統一テスト下でのライティングの授業では考えられません。」という言い方の中に、複文の日本語は複文の英語に訳さないと原文のニュアンスが消えてしまうし統一テストでも点数が取れない、と彼が主張していることである。少なくとも私にはそのように読み取れる。

しかし私たちは統一テストの点数を上げるために英作文を教えているのだろうか。また「複文の日本語」は「複文の英語」に訳さないと原文のニュアンスが消えてしまうのだろうか。「制限用法の和文」を「制限用法の英文」に訳さないと原文のニュアンスが消えてしまうのだろうか。夏目漱石や川端康成の英訳を見れば、決してそうではないことは、すぐ分かることである。原文の意

図するところを読み手に正しく伝えるために、長い日本語文を短く区切って英訳してあることの方がむしろ多いのである。

だとすれば、原文(2.1.0)の制限的用法を生かして英作文したつもりの(2.1.3')も、上記の観点で見直してみる必要がある。

(2.1.0) [昨日花屋で会ったばかり]の男性が 今日私に電話をかけてきた。

(2.1.3) 男性は [その人と昨日花屋で会った]私に今日電話をかけてきた。

(2.1.3') The man [whom I met at the flower shop yesterday] made a phone call to me today.

原文は「昨日、花屋であったばかりで、お互いによく知らない間柄なのに、あの男は図々しくも今日、私のところに電話をかけてきた」という意味合いが込められている。しかし、原文(2.1.0)の制限的用法を生かして英作文したつもりの(2.1.3')では上記の意味が全く死んでしまっている。つまり日本語をそのまま直訳しても原文を生かした英訳にはならないのである。これは英語をそのまま日本語に直訳しても意味の通じる、自然な日本語にならないのと同じである。

では原文を単文に分解して英訳した(2.1.1')(2.1.2')はどうか。ご覧のとおり、文の流れとしてはより自然な(2.1.1')ですら原文の意味からは遥かに遠い。

(2.1.1) 昨日、花屋で一人の男性に会った。その彼が今日、私に電話をかけてきた。

(2.1.1') I met a man at the flower shop yesterday. He made a phone call to me today.

(2.1.2) 今日男性が私に電話をかけてきた。私はその男性に昨日花屋で会った。

(2.1.2') A man made a phone call to me today. I met him at the flower shop yesterday.

要するに単純に分解しただけでは、原文のニュアンスを伝えるものにはならないのである。しかしこれは考えてみれば当然のことである。なぜなら、「きのう花屋で会ったばかりの男性が今日わたしに電話をかけてきた」を「きのう花屋で一人の男性に会った。その彼が今日わたしに電話をかけてきた」と分解した時点で、下線の「ばかり」の意味が死んでしまっているからである。

つまり「情報の流れを考えて単文に分解した方

が英語としても自然になるし、その方が生徒にとっても分解しやすい」としても、それだけでは英訳にならないのである。ではどうすれば良いのか。それは、「ばかり」の意味を生かした単文をまず日本語で作り、それを英訳することである。例えば次のようになる。

(2.1.4) 昨日、花屋で見知らぬ男性に出会った。彼は図々しくも今日わたしに電話をかけてきた。

(2.1.4') I happened to meet a strange young man at the flower shop yesterday. He made a rude phone call to me today.

これなら少しは原文に近い英訳になっているのではないだろうか。また、もしこのような英訳を評価しないとしたら、その統一テストは何を評価しているのだろうか。統一テストにおける「求められた英文」とはいったい何か。日本語として全く不自然なもの、原文の意味が全く死んでしまっているものを英訳して、それが単に「制限的用法」になっているだけで点数が与えられるとすれば、永遠に英語学力は向上しないのではないか。

他方、下記の(2.1.2')(2.1.3')のような文法的には正しくても文脈的には不自然な英語を良しとするのは、英語学力の問題ではなく国語力の問題ではないだろうか。だとすれば、いま求められているのは英語力もさることながら国語力の訓練ではないだろうか。なぜなら英語の作文力が国語の作文力を超えることはないからである。貧しい日本語からは貧しい英語しか生まれない。

(2.1.2) 今日男性が私に電話を かけてきた。私は その男性 に昨日花屋で 会った。

(2.1.2') A man made a phone call to me today. I met him at the flower shop yesterday.

(2.1.3) 男性は [その人と昨日花屋で出会った]私に今日電話をかけてきた。

(2.1.3') The man [whom I met at the flower shop yesterday] made a phone call to me today.

では生徒の日本語を鍛えるために何をすればよいかと問われるわけだが、それについてはスペースに余裕があれば、後で節を改めて詳しく論じたい。

7 日本語と英語を同時に鍛える

さて以上で、寺田報告にあった2番目の問題の内、やっと例1の検討を終えた。そこで急いで残りの問題に移らなければならない。寺田報告では問題2「生徒は関係詞節をとって単文に分解した後に、うまく言葉を補えない」の例2として次の例を挙げている。ここで提起されている問題は既に前節で検討したことでもあるが、復習を兼ねてもう一度、取り上げる。

Ex(2.2) 彼と過ごした3年間は夢のようだった。「私は彼と3年間過ごした。それは夢のようだった。この「それは」が補えない。」この文も「それは」の部分に関係代名詞をいれて文を作ると求められた英文と少しニュアンスが違ってくと思われる。

ここで言う「求められた英文」で何を意図しているのか今一つははっきりしないが、もしそれが「主文 従文の順序になっていず、非制限用法の関係詞文になるから」と理由ならば、それに対する解答は既に前節で出したつもりである。すなわち「和文の直訳は英訳として必ずしも良い訳になるとは限らない」のである。

(2.2.1) 私は彼と3年間過ごした。それは夢のようだった。

(2.2.2) 3年間は夢のようだった。その間、私は彼と過ごした。

したがって(2.2.1)ではなく、主文 従文の順序に分解した(2.2.2)を英訳しても必ずしも良い訳になるとは限らない。なぜなら、どちらも文脈からみて不自然な日本語になっているからである。しかし、これを次の(2.2.3)のようにして英訳すれば、従文 主文の順序であっても、十分に原文に近いニュアンスになる。

(2.2.3) 私は彼と3年間、楽しい日々を過ごした。それは夢のようだった。

(2.2.4) I lived a happy life with him for three years. It was like a dream.

(2.2.5) I had a happy time with him for three years. It was like a dream.

(2.2.6) I spent a happy three years with him. It was like a dream.

(2.2.7) The three years that I spent with him were like a dream.

もちろん(2.2.7)のように、「彼と過ごした 3 年間」を主語にした英訳を作ることが出来れば、それでも良いのだが、これが必ずしも(2.2.4) - (2.2.6)より優れた英訳とも思えないがどうだろうか。したがって結局、情報の流れを考えて単文に分解した方が生徒にとっても分解しやすいし、その方が英語としても自然になるのである。

既に何度も述べたように、和文が制限的用法の関係詞文だからといって、英訳も制限的用法の関係詞文にする必要はない。その方がかえって不自然な英語になる場合もあるからである。要は単文に分解したとき、文脈が生きるような言葉をどう補うかが問題なのである。適切な言葉を補うことが出来れば、むしろ単文のほうが英訳として生きる場合も少なくない。

とすると、優れた英訳はむしろ日本語力に依存することになる。だからこそ、英語力を鍛えるためにも日本語力を鍛えなければならないのである。ところが、昨今の会話ブームや小学校の英語教育論はこの点を全く無視しているし、「英語第 2 公用語論」も全く同じ考え方である。わたしたちが求めているのは、それとは全く違って、日本語を鍛えつつ英語力を高める方法なのである。

#### 8 「直接話法」による単文への転換

さて、やっと寺田報告で提起されている問題の最後に到達することが出来た。報告では「3 番目に、かえって複文のままの方が英作しやすく感じる場合がある。」として次の二つの例をあげ、解説を加えている。

(3.1.1)彼は彼女は嘘をついていると警察に主張した。

これを 2 つの文にするのは案外難しい。2 つの文につながりを持たせることが難しい。かえって が 2 つであることを意識させて「彼は主張した 警察に 彼女言っている 嘘を」の方が簡単です。「? 彼女は嘘をついている。彼はそう警察に主張した。」これは私にとっても難しいです。

(3.2.1)生徒が髪を染めることは校則違反です。

「生徒が髪を染める。それは校則違反です。」  
that 節が主語の場合はどうでしょう。これでも良い気がしますが、どうでしょうか。また複文指導の際は、連結詞はどこに持ってくるよう指導すれば良いのでしょうか。

「 生徒染める 髪 それはです 校則違反」( 1 案 )

「それはです 校則違反 生徒染める 髪」( 2 案 )  
「生徒染める 髪、 です 校則違反」( 3 案 )

そこでまず(3.1.1) から検討する。原文に「記号づけ」をすると、(3.1.2)のようになる。これを英語の語順・文順に転換すると次の(3.1.3)になる。この方が (3.1.4)よりも英訳しやすいと彼は主張するのである。

(3.1.2)彼は[彼女は嘘をついている]と警察に主張した。

(3.1.3)彼は 主張した 警察に [彼女言っている嘘を]

(3.1.3) He insisted to the police that she was telling a lie.

(3.1.4) 彼女は嘘をついている。彼はそう警察に主張した。

考えてみれば確かに(3.1.3)の方が易しいとも言える。英語が一定程度、分かっている人には、(3.1.4)のように「そう」を補うよりも、that 節を使って表現した方が易しいからである。しかし間接話法ではなく直接話法で(3.1.5)のように表現することも出来るはずである。これなら(3.1.3)よりも易しいはずである。

(3.1.5)彼は主張した 警察に 「彼女言っている嘘を」

(3.1.5) He said to the police again and again, "She is telling a lie."

私が高校生を引率して初めてアメリカに 1 ヶ月滞在したとき、ホームステイ先の歯医者 Dr. Jones は必ず直接話法で過去の出来事を語る所以強い印象を受けた記憶がある。彼のような知識人でも間接話法ではなく直接話法で情報を伝達するんだ！と少しショックを受けると同時に気が楽になった。受験勉強で直接話法 間接話法の練習ばかりさせられたので、間接話法で情報を伝えねばならないのだという強迫観念があったが、それから解放されたからである。

だから、寺田報告にあるように、複文のまま英訳した方が易しい場合は、無理に単文にしてから英訳する必要はないのだが、発想を変えれば、やはり単文に変えたほうが易しいことも多いのである。それは次の例(3.2.1)でも同じである。この場



合も、(3.2.3)のようにコロンを使って一種の直接話法に転換すれば英訳は簡単になる。

- (3.2.1) 生徒が髪を染めることは校則違反です。  
 (3.2.2) [生徒が髪を染める]ことは校則違反です。  
 (3.2.3) 生徒が髪を染める：それは校則違反です。  
 (3.2.3') Students dye their hair: it is the violation of the school regulations.  
 (3.2.3'') Some students dye their hair: it is the violation of the school regulations.

ただし、この場合、(3.2.3')のように students を主語にするのではなく、(3.2.3'') のように students を主語にする必要がある。というのは、前者の場合、無冠詞の students 学生一般を指すことになり、また動作動詞の現在形は真理・真実・習慣をあらわすので、「学生というものは髪を染めるものだ」という意味になってしまう恐れがあるからである。しかし後者のように some students を主語にすれば、「髪を染める学生もいるが...」という意味になり、原文の意味に近くなるだろう。

もし、このような煩雑さを避けたいのであれば、その一つの方法は、次の(3.2.5)のように語順・文順を転換して英訳することである。

- (3.2.4) 校則違反です [生徒が髪を染める]ことは  
 (3.2.5) それ ある 校則違反 [生徒 染める 髪]  
 (3.2.5') It is the violation of the school regulations that the students dye their hair.  
 (3.2.5'') It is the violation of the school regulations for the students to dye their hair.

これはよく知られた「形式主語」の構文だが、(3.2.2)の文順をそのまま生かして作文したのも、もちろん考えられる。それが次の(3.2.2'')だが、これでは頭が大きすぎて不安定である。このような英文を作るくらいなら、(3.2.3')の方がまだ良いのではないか。

- (3.2.2) [生徒が髪を染める]ことは校則違反です。  
 (3.2.2') [生徒が髪を染める]ことは校則違反です。  
 (3.2.2'') [こと] [生徒 染める 髪] です 校則違反  
 (3.2.2''') [That] [the students dye their hair] is the violation of the school regulations.

また寺田報告では最後に「複文指導の際は、連結詞はどこに持ってくるよう指導すれば良いのでしょうか」という質問があり、次の三つの案が列挙されていた。しかし、これに対する解答は既にこれまでの議論で出されているはずである。それにしても括弧をつけてないと如何に文法構造が見えにくいかが、下の寺田案で良く分かるのではないか。

- 「生徒染める髪 それはです 校則違反」(1案)  
 「それはです 校則違反 生徒染める髪」(2案)  
 「生徒染める髪、 です 校則違反」(3案)

## 9 おわりに

以上で寺田報告の最後に載せられていた疑問に一通りは答えつつもりである。寺田報告については「辛口のコメントを」という彼の要求に答えて多くの厳しいことを述べて来たが、英作文・自己表現について、このような検討の叩き台を提供してくれた寺田報告にまず感謝したい。先月号でものべたとおり、彼のおかげで、これまで私の頭の中にもやもやとしていたものが、かなり整理できたような気がするからである。

また、これも先月号で既に述べたことだが、授業の進め方など論及しなければならない点はまだ多く残されている。が、今回は作文教科書の複文を単文に転換する際に生じる幾つかの疑問に答えることに焦点を据えた。「授業の展開」「自己表現への発展」などについては、また機会を改めて論じたい。いずれにしても、この小論をもとに記号研の実践が少しでも前進することを願いつつ筆を措くことにする。

<補足> 日本語力の低下は生徒だけが

まず寺田報告では「はじめに」が「ライティングの授業を暗記の授業から考える授業へ」というフレーズで書き出され、以下、次のように続けられている。

「ここでの“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。生徒の英作文力は中学校における文法軽視も手伝って、かなり重傷といえる。成績の良い生徒ですら、初めは主語で次が動詞という当たり前のことですらままならない。同時にこれは日本語を分析する力が無いことも理由として忘れてはならない。日本語力の低下が英作文力の低下とも言える。例えば“校則は厳しいと思う”を英語にすると、多くの生徒が“校則は思う厳しい”とやってしまう。“思う”の主語が何なのかが分からないらしい。」(下線は寺島)

これを読んでまず思ったのは、日本語力の低下は何も生徒だけではなく、「教師も」ではないかということである。なぜなら、上記の報告書を読んでいて下線部で思わず立ち止まってしまったからである。「初めは主語で次が動詞という当たり前のことですら」を読んだとき、一瞬、「初めは主語で次が動詞」が「当たり前のこと」と言われても、それが「何について」が分からなかったからである。英作文について述べているのだから、当然これは英語の語順訳について述べているのだと察しはつくのだが、「ここでの“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」と書き出されていたので、「初めは主語で次が動詞」が日本語のことかと一瞬、途惑ってしまったのである。

しかし、よく読みなおしてみると、上記の文章の後に「生徒の英作文力は中学校における文法軽視も手伝って、かなり重傷といえる。」とあるから、下線部「生徒の作文力は」に注目すれば、「初めは主語で次が動詞という当たり前のことですら」というのが英語についてだということは、ここで納得できた。だが私の頭になぜ混乱がおきたのかをよく考えてみたら、「中学校における文法軽視も手伝って」というのを私は「日本語文法の軽視」と考えて読み進んだからということが分かった。なぜなら「ここでの“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」と書き出されていたので、話題は「日本語分析」だと勝手に思いこんでいたからである。しかも、記号研方式は「まず日本語分析」にあるから、なおさら、そのように思い込んでいたのである。

では誤解を生まない、もっと明晰な文章にするには、上記の文章をどう直せば良いのだろうか。その一つの方法は、「ライティングの授業を暗記の授業から考える授業へ」と書き出し、「ここでの“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」と続けるのではなく、「ライティングの授業を暗記の授業から考える授業へ」そのものをレポートの題目にするか、さもなければ「ライティングの授業について：ライティングの授業を暗記の授業から考える授業へ」のように、それをレポートの副題にすることである。そして問題の「ここでの“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」という文を最後に回す。例えば次のようになる。

「生徒の英作文力は中学校における文法軽視も手伝って、かなり重傷といえる。成績の良い生徒ですら、初めは主語で次が動詞という当たり前のことですらままならない。同時にこれは日本語を分析する力が無いことも理由として忘れてはならない。日本語力の低下が英作文力の低下とも言える。例えば“校則は厳しいと思う”を英語にすると、多くの生徒が“校則は思う 厳しい”とやってしまう。“思う”の主語が何なのかが分からないらしい。だからこそ“日本語分析”がまず必要なのである。したがって、タイトル「考える授業」の“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」(下線は寺島)

こうすれば、「生徒の英作文力は中学校における文法軽視も手伝って」の「文法軽視」は「日本語文法」ではなく「英語文法」であることが、より明確になるし、なぜ“考える”とは“日本語分析”“日英語の比較”を指す。」のか、その理由も読み手に分かりやすく伝わるのではないか。つまり既に述べたように、日本語力がないのは生徒だけでなく「教師も」なのである。したがって日本語に「記号づけ」するのは、単に生徒のためだけでなく、教師が自分の書く文章のあいまいさをなくし、より明晰な文章にするための訓練だと思っているのである。野澤報告の生徒も書いているように、自分の文章に「記号づけ」して初めて日本語には主語がないことや自分の文章のゆがみを発見することが少なくないからである。